

聖書

聖書は、創造者なる神の「知恵、知識、真理の宝庫」

「直ぐな心で（ヨシエル）」、聖書に向かう者は多くの宝を見つけ、何よりも神に出会う

詩篇119：7、エペソ人6：5「真心から」、マタイ13：44-46

しかし、深く知ること「知識」をどれほど積んでも、信じ委ねる「信仰」には至らない

- **4** 神の約束の確かさ、成就の確かさ
- **6** 究極的に立証される神のすべての言葉
真理は人生の諸問題の解決策

聖霊のバプテスマと異言

聖霊によるバプテスマ

「すると、みな**が聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話しました**」（使徒の働き2：4）

☆一つ心で集まっていた者たち全員、聖霊のバプテスマを受けた

☆キリストが予告されたことの成就 マルコ16：17

☆旧約時代も多くの人々、霊的経験と祝福を受けた

† 出エジプト記28：3 † 創世記41：38 † 詩篇51：10-11

† エゼキエル書2：2 † ペテロ第二1：21

1. 洗礼者ヨハネの場合

2. マリヤの場合

3. キリストの場合

4. キリストの弟子たちの場合

主にあるミニストリーを始める前に、聖霊のバプテスマを受けるようにと

キリスト、弟子たちに指示された

5. 旧約の聖徒たちの場合

新約時代のように、神が御霊を無限に与えられることはなかった

⇒ 聖霊のバプテスマによって、信じる者の生命、人生に神の御霊が無限に与えられ、流れ出る
ヨハネ7：38-39

コリント人第一14章

パウロ、聖霊の役割と賜物について語るのに、14章全章を費やした
焦点は、混乱と分裂

異言の賜物

聖霊の賜物に関する誤った教え

1. 賜物の授与を西暦一世紀の初代教会時代だけに限定する

2. 賜物と体験とを過度に強調する

新約聖書に記されている異言の賜物

1. キリスト昇天後のペンテコステの日の出来事

2. 弟子たちへのキリストの別れの言葉 マルコ16：17

3. カイザリヤの百人隊長コルネリオの家での出来事 使徒の働き10：45-46

4. エペソでパウロ、聖霊のバプテスマを受けたかどうかと尋ね、
「主イエス・キリストの御名によるバプテスマ」を受ける必要を告げ、
聖霊を受けた者たち、異言で語り始めた 使徒の働き19：6

背景

★神秘的宗教の影響、コリント教会の礼拝形式の中に浸透

異端からの「異言」での熱狂的な語り

★異端では特に女が神懸りの異言を発し、神々の神秘の域に達した者だけの能力とされた

教会の中にも異端的なものも多く混入、霊的な個人的体験、神々との一体感が追い求められた

聖書

- ★真理と偽りの共存が教会に広く浸透
麦と毒麦の共存 マタイ13：24-30、：36-43

パウロの方策

- ★主の再臨のときまで、真偽の選択は主に任せる
- ★防御策として、正しい方向づけ、善悪を見分ける基準を提示

①1-19節

- ★神からの真の「異言」と神がかり的な異端の異言とは形式的にも、性質上も全く違うことを教示
- ★パウロ、異言を霊の賜物と認めたが、異端の異言を教会に持ち込むことを禁止

三つの指示

1. 愛を追い求めなさい
 2. 霊の賜物を熱心に求めなさい
 3. 特に預言することを求めなさい
- ★御霊の実「愛」は、賜物よりもっと重要

新約聖書の予知的預言

- ★アガボ 使徒の働き11：28
- ★パウロ 使徒の働き27：9-44
- ★ヨハネ 黙示録1：3、22：9
- ★キリスト マタイ10：19-20

- ：4「異言を話す者は自分の徳を高めませんが、預言する者は教会の徳を高めます」：
賜物が他人を助けるためにどのように用いられているか？

鍵となる吟味

キリスト者の人生における神の御霊の實在の確証

1. 聖霊の関心は、賜物ではなく、人の性質
2. 聖霊は、主イエス・キリストに栄光を帰すため来られた
3. 聖霊は、ミニストリーと証しのために、キリスト者を備えるために来られた

- ：6「私があなたがたのところへ行って異言を話すとしても…何の益となるでしょう」：
意思の疎通がうまくできなければ、愛の親しい交わりはできない
- ：8「…ラッパがもし、はっきりしない音を出したら、だれが戦闘の準備をするでしょう」：
音を出す楽器の音が明瞭でなければ、用をなさない
- ：13「…異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい」：
★ここでは公の礼拝が視野
★口から放たれる言葉が、明快で教示的でないなら、話し手は黙っているべき
- ：15「…私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し…」：
祈り（嘆願）と、賛美（受けた祝福に対する喜びの応答）が視野
- ：16「…異言を知らない人々の座席についている人…」（下線付加）：
求道者、23節の「初心の者」
「アーメン」：
「その通り」、「その通りであるように」の意の全国共通のヘブル語
- ：18「私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが」：
経験者の立場からの明確な意見
- ：19「教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために…」（下線付加）：
「集会では」の意、—この時代、キリスト教徒の建物はなかった—

聖書

②20-25節

☆霊の賜物におぼれたコリント教会への警告

☆21節で、イザヤ書28章11-12節の神の言葉を引用

☆イザヤ書28章のメッセージ

1. 神の警告に反逆し続けた北王国が、預言通り滅亡したことの覚え
2. 兄弟部族の国家滅亡の悲劇を目撃しながら、背信に陥っている南王国に、悔い改めて神に立ち返るようにとの呼びかけ

☆パウロが引用した聖句は、反逆する北王国の不遜な態度を描いた9-13節の文脈が背景

☆イザヤ、主の単純明快なメッセージを心を頑なにしてお聞きしないなら、

主はもはや理解できる言葉では語られない、

外国語で、一理解できない「もつれた舌」（異言）で一話される、と神の言葉を取り次いだ

☆その結果、聞く耳のない北王国エフライムは滅びた

☆神が外国の言葉（理解できない異言）で語られなければならなかったのは、

不信仰なイスラエル、「不信者」に対してで、「信者」に対してではなかった

☆パウロ、ヘブル語聖書の例証から、今コリント教会で起こっている現象を見分ける基準を

提示、「異言」がむしろ信じない者に対する神の譴責として用いられたことを強調

☆コリント教会内で、間違っても異端の異言によって悪霊の呪いのメッセージが語られる

ことがないように、戒める必要があった 12:3

- : 20 「…**悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい**」 :
御霊の賜物やしるしばかりを追い求めていたコリントの教会の人々、異言の賜物を誇示、この賜物に欠けた人たちをさげすむような振る舞いで、むしろ、自分たちの未熟さをさらけ出した
- : 21 「わたしは、**異なった舌により、異国の人のかちびるによってこの民に語るが…**」 :
恍惚状態の祭司や偽預言者、神のメッセージを「わけの分からないことを繰り返し、幼子に説明しようとしているかのようだ」と一笑に付し、イザヤをあざけた
- : 23 「…**教会全体が一か所に集まって、みな異言で話すとしたら…気が狂っていると…**」 :
全員一斉に異言で語ることは、救われていない者たちのあざけりを引き起こす
→異言を誤用する結果起こること
- : 25 「**心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられ…**」 :
自らの罪を認識することと、悔い改めることは、救いと、聖霊の内なる満たしにあずかるための、欠くことのできない必要条件
† 預言者ナタンに、秘めていた罪を指摘されたダビデ
† キリストに罪赦されたサマリヤの女
† キリストから直接啓示を受け、教えられたパウロ

③26-40節

☆自分中心の動機で、「**御霊を熱心に求め(る)**」過ちに陥らないための安全弁は？

☆キリスト中心の礼拝をし、教会の徳を高めるために賜物を用いることをパウロ、奨励

第一の安全弁

神から授かる超能力が発揮されるのは、相互関係において

第二の安全弁

現象の真偽を見分ける正しい基準

1. 「**イエスは主です**」（12:3）と告白する霊は正しい神の御霊
2. 教会内の一致
3. 話し手を支配するような霊は、悪霊、偽りの霊
4. 秩序と平安

第三の安全弁

†授けられた権威の下で神の言葉を教え、伝えている使徒パウロの指示に従うこと

†パウロが提示した基準に従順か否かで、各自が行使している「**霊の賜物**」の虚偽を判定

⇒パウロが取った方策は異言の禁止ではなく、その**真偽の見分け方を教えること**であった

聖書

礼拝時に異言を語る時の制約

1. 人数：二人か、多くても三人まで
2. 秩序：各々が順番に
3. 解釈：啓蒙のためには必須
4. 沈黙：解釈がない場合
5. 献身：個人的に神に向かって話すことは、教会での礼拝とは関係がない

扱われるべき関心

1. 規律正しさと礼儀作法
2. 警告：神の民を異端の神々へと迷い込ませる偽預言者に警戒
3. 見分けの基準は、神の言葉

： 32 「**預言者たちの霊は預言者たちに服従するものなのです**」：

預言を語る人たち、自身の意識を完全に制御できる状態で語るべき

： 33 「**それは、神が混乱の神ではなく、平和の神だからです…**」：

真偽を見分ける鍵

： 34 「**…妻たちは黙っていないさい。彼らは語ることを許されてはいません…**」（下線付加）：

☆ギリシャ語動詞「ラレオー」は話す、尋ねる、論じる、おしゃべりするの意

☆公で話すこと（スピーチ）についてではない

シナゴグでの礼拝形式

☆礼拝中、夫たちがいろいろな質問を始めると、女たちが横槍を入れ、礼拝が乱された

☆男たちの質問に対し、女が男に意見を述べることは制止された

☆礼拝形式、創世記2：18-24の創造の秩序に準拠

： 35 「**…家で自分の夫に尋ねなさい。教会で語ることは、妻にとってはふさわしくない…**」：

当時受け入れられていた習慣、慣例への準拠、「慣習を守りなさい！」

女性キリスト者のミニストリー

☆女不在の宣教活動は不可

☆女不在の教会設立は不可

☆サマリヤの女の伝道者としての働き、主にあるミニストリーのはしり

☆ピリポの四人の娘たち

☆マグダラのマリヤ

☆聖書学者アポロを正しく導いたプリスキラ

： 37 「**…私あなたがたに書くことが主の命令であることを認めなさい**」：

パウロ、人々に、パウロの背後におられるキリストを話し手として見るようにと指示

異言で語る

☆異言とは、話し手自身の知らない他言語を超自然的に発声する現象

☆未信者へのしるしで、イザヤの預言の成就

☆異言の主要な目的は、罪人が奇蹟的な経験を通して超自然的な神の顕れを見ることで、信じない者に対するしるし

☆異言は、聖霊の賜物を受け、新生体験をした受洗者に直ちに靈感によって生じる現象、それ以降、受洗者は望むときに神に向かって異言で話すことができる

☆預言、異言、異言の解釈等、音声を伴う賜物はふさわしく規制されるべきで、吟味、判断が命じられた

異言を語るべきではない場合

1. 愛で語られないとき
2. 恒例の教会の集会で、解釈する者がいないとき
3. 会衆に真理を告げる必要があるとき
4. 異言を知らない人たちも交えた食卓で、食前の祈りをささげるとき
5. 全教会は異言で話したい、しかし、そこにそのような行為につまずく人たちもいるとき
6. 二、三人の者が異言でメッセージを語った後、語り続ける前に、まず解釈されるべき